

平成25年度 地域家庭教育県北ブロックセミナー

日時:平成25年12月8日(日) 午後1時より 場所:福島県男女共生センター

県では、家庭における子どもをはぐくむ環境づくりや地域の教育力の向上に向けて、実践的な取組をしております。

今回の県北ブロックセミナーでは、PTA関係者など約150名の方に御参加をいただきました。

まず始めに、千葉大学名誉教授の明石要一氏から、家庭の大切さや地域の力とそのつながりについて講演をしていただきました。さらに、県北域内での事例を紹介し、子どものよりよい生活習慣の向上に向けた取組について、みなさんと話し合い、考えました。



1 開 会

(1) 主催者あいさつ (福島県教育庁県北教育事務所長 芳賀祐司)

(2) 諸連絡

2 講 演

演題「学校と家庭と地域が連携して育む子どもの未来」

講師 千葉大学名誉教授 明石要一 氏

3 事例発表

(1) 伊達郡川俣町立富田小学校での学校・家庭・地域の連携実践 (食育)

発表者:伊達郡川俣町立富田小学校教諭

佐藤登志江 氏

(2) 伊達地区PTA連絡協議会月館ブロックでの連携実践 (ノーゲームデー運動を通しての生活時間の見直し)

発表者:伊達市立月館中学校PTA会長

渡辺里加 氏

(3) 福島市松川地区幼・保・小・中学校接続事業での家庭・学校・地域の連携実践 (あいさつ運動)

発表者:福島市立松陵中学校教頭

斎藤 剛 氏

4 研究協議

(1) 第1分科会 (食育に関する取組)

指導助言 福島県教育庁健康教育課指導主事

今井不二子

(2) 第2分科会 (生活時間の見直しに関する取組)

指導助言 福島県教育庁県北教育事務所指導主事

伊藤 栄

(3) 第3分科会 (あいさつや規範意識に関する取組)

指導助言 福島県教育庁県北教育事務所主任社会教育主事

酒井隆志

5 ま と め

福島大学人間発達文化学類准教授

原野明子 氏

(地域家庭教育県北ブロック会議座長)

6 閉 会

講演(午後1時10分～午後2時40分)

演題「学校と家庭と地域が連携して育む子どもの未来」

講師: 千葉大学名誉教授 明石要一 氏

講師紹介

大分県出身で、千葉大学教育学部教授、教育学部長等を歴任。平成25年3月に、千葉大学を退官。現在も、千葉大学名誉教授として活躍。一方、文部科学省中央教育審議会生涯学習分科会臨時委員、NHK関東甲信越番組審議委員長なども歴任。専門は、「教育社会学」で、子ども文化の育成、学級集団的機能の見直しなどを主な研究課題として取り組まれてきた。

著書として、「子ども理解のウオッチング技術」(明治図書)、「子どもの規範意識を育てる」(明治図書)、「子どもの放課後改革はなぜ必要か」(明治図書) など多数。



千葉大学名誉教授 明石要一 氏

1 頭の体操

- (1) アメリカの西部劇の話。人々が移民をして暮らしをしていくために、まずは、人々は土地と家の確保をする。その後、地域のみんが住みよくするために3つの整備をする。1つ目は人々の心の不安を取り除き安心を持たせるために教会を作ること。2つ目は、子どもの教育をするために学校を作ること。そして、犯罪を取り締まるための保安官を呼んでくること。地域が安全安心なものにするためには、この3つの整備をすることが大切であった。
- (2) 私たち人間は、油断を見せる時が3つある。1つ目は寝ているとき。2つ目は食事のとき。3つ目はトイレに入っているとき。この3つは、人間のホッとするとき。この場で子どもをしかってはいけない。
- (3) 幼児のままごと遊びに変化が出てきた。作る遊びから配膳遊びに変わった。それは、母親の就労体系の影響がある。母親の食事を作る場面を見ていない。スーパーから買ってきたものを配膳する場面を見ている。母親が子供の前で苦勞して、手間暇かけて料理を作る場面を見せることが大切である。
- (4) 幼稚園卒と保育園卒の子どもには違いがある。保育園卒の子どもは、あくびをしたり、不適応を起こしたりする傾向が見られる。そこには、2つの理由がある。一つは、幼稚園の子どもは寝る時刻が平均9時。早寝早起きの習慣が身についている。保育所の子どもは、保護者の都合で寝る時刻が平均1時間遅い。遅寝遅起きが多い。家庭の生活状況で、子どもの生活習慣が変わる。二つ目は、保育所は0歳児から5歳児までを対象とし保育期間が長い。一方幼稚園は、長くても3年間で午前中だけ。幼稚園の方が学校のリズムに適応しやすい。学校の教員は、幼稚園卒と保育所卒の子どもの違いをよく把握して、その生活の適応状況を確認することが大切である。子どもにあった対応が学校には求められる。

2 時代は変わった

今は少子化の中で子どもの親戚が少なくなった。具体的には「いとこ」が少なくなった。昔はいとこがたくさんいて、いとこがよきライバルだった。しかし、今はいとこが少ないので競争意識が低いし、相談相手もない。そうした「いとこ」が少なくなった現状に対応するためには、地域が大切になってくる。縦の関係(先生と子ども)・横の関係(同級生)に加えて、斜めの関係(いとこの関係、育成会、地区児童会、ボーイスカウト等)を作っていく必要がある。

3 今の子どもの何が問題か

- (1) バレーボールができない子どもの増加。バレーボールは対応能力が必要とされるが、その低下が見られる。今の子どもたちは幼児期にケンケン遊びなどの体験をしていない。スキップもできない。木登りもできない。そうした豊かな体験を経験していない。豊かな体験を経験させ、ハンディキャップをアドバンテージに変えられる子どもを育てていきたい。
- (2) チャレンジしない子どもの増加。バスケットボールなどのゲームをやると自分でシュートをしな。横にパスして人に任せる。自分をみんなの前でパフォーマンスできる子どもを育てたい。
- (3) ミーティングができない子どもの増加。今の子どもは、集まって物事を決めることができない。ディスカッションができない。人が決めたことを行動するのはうまい。指示待ち人間になっている。今の日本社会は、自分から手を挙げなくても黙ってでも生活することができる。こうした子どもになってきた理由として小学3, 4年時の遊びが足りなかったことがあげられる。ギャングエイジなのに、秘密基地を作った経験が少ない。非常に経験が不足している。ルールやマナーが育たない。これをカバーするのが地域である。
- (4) 肉食女、草食男が子どもにも増えている。戦後68年間、女性は変わっていない。男性が弱くなった。男の一人ぼっちが増えた。しかも「ふわふわ」している。友達関係も不安定。その原因も小学3, 4年の時のギャングエイジの時代での体験が不十分だからである。
- (5) 子どもの大人化が見られる。子どもが大人と同じ時間を過ごしている。昔は、子どもの時間があった。忙しい子どもが増えた。スケジュールに従った子ども生活。時間を無視して遊びほうけたような経験が今の子どもには少ない。小学2, 3, 4年は「遊びほうける」時間があった。今の時代、子どもの放課後の時間が少なくなった。

4 子どもの問題を解決するために

- (1) 子どもの放課後の時間を有効に活用させていきたい。
- (2) 第3の大人を大切にしてほしい。第1の大人は親。第2の大人は学校の先生。第3の大人が地域のおばさん・おじさん。いいおじさんおばさんと変なおじさんおばさんがいる。そうした人たちとの関わりがよい経験になる。発達段階に応じた第3の大人の存在が大切である。本気で接し、本気でしかってくれる大人が必要である。
- (3) 経済格差が体験格差を生んでいる。体験はお金で買える。年収の少ない子どもは体験が不足している。その格差を少なくしていくことが豊かな放課後であり、地域の力である。
- (4) 小学3, 4年生の時（ギャングエイジ）の体験を十分にさせたい。集団の中でのやんちゃ遊びが大切である。そして、集団の中でのルールをしっかり身に付けさせたい。そうした経験を身に付けておけば、中学校にいったの不適應などはなくなる。

5 子どもたちにどんなスキルが必要か

- (1) テクニカル・スキル（専門的な能力）・・・パソコンでホームページを作成したり、エクセルを使いこなしたりする能力
- (2) コンセプト・スキル（メッセージ力）・・・部活動の部長や主将、マネージャーの経験、あるいは学園祭の実行委員長やボランティア活動の経験など。集団をリードしまとめる力。学校の特別活動や社会体験で得られる力
- (3) ヒューマン・スキル（交渉力・人間力）・・・自分だけが体験したことを自分の言葉で表現する力。だれにもまねできない体験を多くの人にわかりやすく、自分の考えた言葉で表現する力でもある。体験の力と言語能力が必要になる。3つのスキルの中では一番大切にしていかなければならない力である。

6 二つの風と一つの色運動を起こす

- (1) 家風（家訓・家紋、家自慢）
- (2) 校風（校訓、校旗、学校自慢）
- (3) 地域色（地域のカラーを出す、町自慢）

この3つの運動を起こすことは、学校と家庭と地域がトライアングルで子どもを育てていくことにつながる。ぜひ、この運動を進めていきたい。

事例発表①(午後2時55分～午後3時15分)

「川俣町立富田小学校での学校・家庭・地域の連携実践」(食育)

発表者: 川俣町立富田小学校教諭 佐藤登志江 氏

取組みの概要

- 校内食育推進委員会の実施
 - ・食育推進コーディネーターが中心となって委員会開催
 - ・学校全体の食育の目標や具体的取組の話合い
 - 児童会保健委員会による啓蒙活動
 - ・全校朝会での劇発表
 - 肥満傾向児童への個別指導
 - 外部講師による食育授業の実施
 - 学校保健委員会の実施
 - ・学校医、保健師、多数の保護者の参加により、児童の健康の在り方を検討
 - 朝食摂取状況調査
 - わたしを作る朝ごはんコンテストへの参加、希望献立コンテストの実施
 - おたよりを活用した保護者への啓発
- ※ 富田小学校は、県教委主催の平成24年度朝食について見直そう週間運動「食育推進実践校表彰」で最優秀賞を受賞。今年度は、福島県学校保健会優良学校として表彰されています。



事例発表②(午後3時15分～午後3時35分)

「伊達地区PTA連絡協議会月館ブロックでの連携実践」 (「ノーゲーム運動」などを通じた生活時間の見直し)

発表者: 伊達市立月館中学校PTA会長 渡辺里加 氏

取組みの概要

- 県学力調査・生活状況調査の結果から子どもたちのテレビ、ゲームの実施時間が長すぎるということがわかった。このような現状に対して、子どもたちの生活状況を何とか改善しなければならないと考えた。
- 「ノーテレビ、ノーゲーム」運動の両方取り組むのではなく今年度は「ノーゲームデー」に絞って取り組むことが大切であると考えた。ゲームに使っている時間を、家族団らんや、家庭学習・読書に向けさせることで生活時間の改善が少しでもできればと考えた。
- 毎月1のつく日は「ノーゲームデー」運動の実施。学年だより、学校だよりに掲載し、子どもたちも保護者も少しずつ意識が高まってきた。その日は、家庭の団らんにあてたり、学習の時間にあてたりなど生活時間の見直しが図られつつある。
- 今後は地域とも連携し、広報車を通して「毎月1のつく日はノーゲームデー」の実施を広報し、地区全体で盛り上げていき、子どもたちの生活時間の見直しを図っていきたい。



事例発表③(午後3時35分～午後3時55分)

「福島市立松川地区幼・保・小・中学校連携事業での家庭・学校・地域の連携実践」(あいさつ運動)

発表者: 福島市立松陵中学校教頭 斎藤 剛 氏

取組みの概要

- 松川地区幼・保・小・中学校連携推進研究協議会
福島市教育委員会の事業として小中の接続について研究や実践が行われてきた。昨年度から幼稚園や保育園との接続も重要であると考え、各園の理解を得て連携協議会に参加することになった。
- 共通実践事項の決定
3つの「あ」運動の推進 (あいさつ、安全、後片付け)
 - ・あいさつの指導の継続 (学校生活のあらゆる機会を使って家庭でのあいさつの励行)
 - ・自転車の運転、歩行についての指導
 - ・～君、～さんと呼ぶ習慣
 - ・Q Uテスト (楽しい学校生活を送るためのアンケート) の引き継ぎ
- 成 果
 - ・ 学校生活のあらゆる機会を使って、それぞれの園・学校の特徴に応じて工夫した「あいさつ」の指導への取組を継続してできた。それにより子どもたち同士・教師と生徒の心の交流が図られて、活気ある園・学校生活を送ることができている。



研究協議(午後3時55分～午後4時40分)

第1分科会 (食育に関する取組)

指導助言 福島県教育庁健康教育課指導主事

今井不二子

第2分科会 (生活時間の見直しに関する取組)

指導助言 福島県教育庁県北教育事務所指導主事

伊藤 栄

第3分科会 (あいさつや規範意識に関する取組)

指導助言 福島県教育庁県北教育事務所主任社会教育主事

酒井隆志

第1分科会

「食育に関する取組」



(指導助言から)

- 富田小の取組について、組織を挙げて食育に取り組んでいることに注目したい。学校挙げて取り組んでいる。そして、食育だけにこだわるのではなく、健康教育全体を考えた中での食育の推進であることが素晴らしい。健康に対するビジョンが明確である。そうした体制が、家庭にもPTAにも地域にもわかりやすく、連携が図ることが可能なのだと思う。PTAの協力はとても素晴らしく、富田小の取組を大きく支えている。
- 「お弁当づくり」の取組が進んでいるが、反復練習が大切である。家庭を巻き込みながら継続して進めていくことが何より大切である。

第2分科会

「生活時間の見直しに関する取組」



(指導助言から)

- 月舘地区の取組について
 - a 課題があって、その解決のためにノーゲームというものの一つに絞ったことがとてもよい。
 - b 学校だけでなく、家庭やPTA、地域が連携したところが素晴らしい。地域の教育力が低下しているところでもよい。
 - c キャッチフレーズ化して取り組んでいたところも素晴らしい。
- 今後期待すること
 - a 課題の焦点化が大切である。なぜ4時間もテレビ・ゲームをやっているのか、その原因を探ることが大切である。
 - b 「ゲームやテレビはだめだ」だけではだめ。マイナス思考。家庭団らん、読書の時間、家庭学習の時間など色々な取組が考えられる。
 - c 規律の大切さ。ゲームの時間がゼロであれば学力が一番かというわけでもない。ゲームを無制限にやらせるのではなく、そこにきちんと規律を結びつけていくことが大切である。

第3分科会

「あいさつや規範意識に関する取組」



(指導助言から)

- 事例発表について
 - 幼保小中で取り組み、子ども像を明確にしている。また、地域の特徴を出しているところもよいところである。連携だよりでの広報もよい取組である。
- 地域全体の課題を明確にし、発達段階に合わせた目標設定して取り組み、PDCAマネジメントサイクルでの改善を図っていくこと。
- 学校・家庭・地域が連携した取組をするために、一括して地域に発信する仕組みが有効である。
- 覚えやすい取組の名称にすることも有効である。
- 成果を児童生徒や地域に発信して、継続させることが大事である。

まとめ(午後4時40分~午後4時45分)

福島大学人間発達文化学類准教授 原野明子 氏

地域家庭教育県北ブロック会議座長である原野明子先生より全体のまとめをしていただきました。

○ 子どもたちの生活習慣の向上を図るために地域と学校と家庭が連携することを呼びかけてきたが、そのために何か新たなことを実施することは、学校はもとより地域の方々に新たな負担感を増やすのではという懸念があり、なるべくこれまでの実践を工夫したり、みんなで連携したりすることで、負担感を感じることなく問題解決ができるのではということを進めてきた。本日の3つの事例もそうした発表だった。



○ 子どもたちの日々の生活を振り返ったとき、「あれをしてはだめ」「これをしてはだめ」など否定的な面にばかり目がいってしまう。それは、家庭の中でも学校生活でも地域の中でも問題が起きないようにしようという大人の側の都合が大きい。面倒なことを避ける傾向が見られる。本日の実践事例は、子どもをめぐる問題をしっかりとらえ、それを解決するための方策を考え実践している。しかも、その取組を前向きにとらえ、興味の幅を広げながらとことんまで取り組んでいるところが素晴らしい。そして、子どもたちもここまでやってくれる大人たちがいるということで、進んでその取組に関わろうとしている。こうした経験をしている子どもたちは、親からだけではなく、地域全体から愛情をたくさんもらっているのだということに気づいていくのだと思う。地域からたくさんの愛情をもらっている子ども(安全基地としての家庭・学校・地域にいる子ども)たちは、将来きっと自分が人のための安全基地を築ける人になり、人を安心させる人、人に愛情を注げる人になるのだと思う。

○ 震災の中でどうしても疑心暗鬼になったり、突出しているところをたたいたり、足を引っ張ったりすることがあるが、そうではなくて折角やるのであれば、お互いが元気をもらいあって、元気をつけていくようになればと思う。

○ 本日の事例発表をとおして、見えない学校の中や地域で行われていることがわかり合うことができた。今後もお互いの実践を出し合い理解し合うことが大切である。

参加者の感想から

- ・ 明石要一先生の話は、学校・家庭・地域のデータを押さえた説得力のある、とてもおもしろい話の内容で、聞いてよかったと思う。
- ・ 講演の内容がわかりやすく、具体的で、現在の子どもの課題とどのように対応していくべきかという方向性が少し見えてきた。
- ・ 地域・家庭・学校の連携をどのようにすすめていけばよいのか、具体的な取組事例からよくわかった。それぞれの団体の実情に応じたアクションが起こせると思った。
- ・ それぞれの内容が有機的に結びついており、テーマを絞っての事例発表は参考になった。どんな生活習慣を身に付けるかは、どのような生き方をしたいかということにつながると思う。
- ・ 市の接続事業にPTAが入ることの重要性を感じた。(生徒指導の課題に対して、PTA会長が参加、協議場面に応じた参加を要請していくことが大切である。)
- ・ 今こそ、家庭・地域の連携が大切だと実感しています。PTAの意味とか、何をするのかについて、もっとアプローチしていきたいと思います。